

1 年 音楽科学習指導案

授業者 赤堀 真理

1. 題 材 名 「あそびうた研究所」(歌唱)

教 材 名 『ひらいたひらいた』『とんぼとんぼ』『十五夜さんのもちつき』

2. 題材の目標

○曲想と音楽の構造、曲想と歌詞との関わりについて気付くとともに、思いに合った表現をするために必要な、互いの歌声を聴いて声を合わせて歌う技能を身に付ける。

[知識及び技能 A(1)イ、ウ(ウ)]

○旋律や拍を聴き取り、その働きが生み出すよさや面白さを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、どのように歌うかについて思いをもつ。

[思考力、判断力、表現力等 A(1) ア]

○遊び歌を歌ったり、歌に合わせて体を動かしたりする活動に興味をもち、音楽活動を楽しみながら、主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組み、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにしようとする態度を養う。

[学びに向かう力、人間性等]

3. 子どもと題材

この春入学の1年生は、様々な園から来ており、幼児教育での取り組みや積み上げが様々である。本学級では、朝の会の健康観察にて「名前呼び遊び」(「〇〇さん」「はあい」)を行っており、子どもは声の様子や表情で、その日の調子を表現することに親しんでいる。また、休み時間に自分の知っている「数え歌」や「遊び歌」、「絵描き歌」で友達と仲良く遊ぶ様子からは、日本語の節回しや遊び歌は、人と人がよりよく繋がることのできるコミュニケーションの基礎であることや、日本伝統音楽の旋律や拍感が息づいていることを、担任として大いに実感しているところである。

そのため、幼小接続の観点からも、それぞれの家庭や園で今までに遊んだことのある歌を取り入れ、幼児教育の経験と関連付けたり、附属幼稚園と連携を取り子ども同士で交流できる機会を取り入れたりとすることで、子どもが安心して小学校の音楽の学習をスタートさせ、音楽の授業が好きになるきっかけをつくれるだろうと考え、本題材を構想した。

本学級の子どもは、初めて出合うものに対し「自分は確実にできる」という確信をもてないと、自信をもって活動できなくなる傾向がある。「何事もしっかりやりたい」という意識が強いいため、自分よりもよくできる相手を目の当たりにした時に、気後れしてしまうこともある。5月に行った「拍とリズム」の題材において「しろくまのジェンカ」を歌った際には、幼稚園で歌ったことがある子が既に習った振り付けを生き生きとダンスしていたところ、他の幼稚園から入学した子がその様子を不安そうな表情でじっと眺める子どもの姿があった。次時、1人の子が学級全体へダンスの動きを実際に踊って見せ、もう1人の子が言葉でその動き方の説明をし、その上さらに教師から「自分で動いてみよう」と投げかけて何度か練習して自信がもてたところで、ようやくクラスの友達と列を組んで動き、歌うことができたという場面があった。そのため本題材では「自分も知っているような遊び歌」を取り入れて自信をもたせたり、「みんなが知らないような遊び歌」を取り入れて全員が同じ条件で「遊び歌」を研究しながら親しんだりできるようにすることで、子どもがそれぞれもつ音楽的な感性をのびのびと発揮できるような場を作りたい。また遊び歌の「遊び方」を考える活動を行うことで「どのように遊んでも大丈夫」という安心感の中で、音楽と触れ合う空間を存分に味わい、正解が決まっていない自由さの中で生まれる即興性のあるやりとりをしながら、自分らしさを発揮し楽しく音楽を学んでいく姿を期待する。実際に5月に行った「拍とリズム」の題材においては、「ぶんぶんぶん」を歌った際に、自然とハチが針を刺す動きのまねをしたり、歌のリズムに合わせて手拍子を打ったりしていて、思い思いの動きでリズムを感じることができた。このことから、本学級の子どもは、歌詞への想像力、動きを工夫する力、自分の感じ

たことを表現する力が高いととらえられる。そのような子どもの「音楽に対する想像力・創造力」を、本題材での遊び歌の「遊び方」を考える際にも存分に生かしていきたい。

また本学級の子どもは、人と関わることが好きである一方、相手の気持ちを深く考えることに至らず、自分のしたいことを優先し、一方的なコミュニケーションとなってしまう場面も見られる。そのため、本題材で「遊び歌」を取り入れて学ぶことにより、呼びかけとこたえにおける「双方向性」や決まった拍の中で歌って動く「規則性」の中で、真に平等な相手との関わり、対等なやり取りの心地よさ、仲間と協働して一つの曲に浸る楽しさや達成感を味わってほしい。

また本学級の子どもは、適切な声の大きさを理解しきれておらずに怒鳴ったように叫んで歌う子や、他者に届かないような弱い声で歌う子など、「発声の仕方」が適切に身に付いていない子も多い。そのため「遊び歌」を歌い、自らの声を自覚する経験、目の前の相手と直接やり取りする経験を通して、相手にも自分にも心地よく聴こえるような自然な発声の仕方を見つけられるようにしたい。

また、子どもの中には歌のリズムや旋律を十分に意識できておらず、音の高低やリズムを創作して歌ってしまう子もいる。本題材の中で毎時間「遊び歌」に触れ、何度も聴いて歌う時間をつくることで、「拍」の中で「旋律」を意識した歌い方ができるようにしたい。そこで「構成音の数や種類」「音域の広さ」「歌に合わせて行う動作の種類との関わり」から、特に「旋律」を意識しやすい歌と特に「拍」を意識しやすい歌を分類し、本題材で取り入れるべき歌を考えた。

特に「旋律」を意識しやすい歌	特に「拍」を意識しやすい歌
構成音 … 約2～5音 音域 … 比較的広め 動作 … 旋律に合わせた流れるような動きや歌詞の内容に合わせた動きをすることが多い。	構成音 … 約2～3音 音域 … 比較的狭め 動作 … 拍に合わせて手を合わせたり動いたりする動作が多い。
・手遊び歌（だるまさん にらめっこ） ・動き遊び歌（かごめかごめ） ・絵描き歌（まるかいてちゃん） ・子守り歌（ねんねん ころりよ）	・数え歌（いち、にい、さんまのしっぽ） ・手合わせ歌（おちゃらか） ・手まり歌、お手玉歌 ・縄跳び歌
「じゃんけん」「ひらいたひらいた」「げんこつやまのたぬきさん」「あしたてんきになあれ」「だるまさんがころんだ」「あがりめさがりめ」「おてらのおしょうさんが」「はないちもんめ」「あぶくたった」「にいちゃんが」「さんちゃんが」「ぼうがいっぱんあったとさ」	「どれにしようかな」「おちゃらかほい」「おせんべやけたかな」「ちゃちゃつぽ」「ずいずいずっころばし」「なかなかほい」「おおなみなみ」「あんたがたどこさ」「なべなべそこぬけ」「十五夜さんのもちつき」

一般的に「わらべうた」というのは身体の動きとの同期が容易であり、音高や速度等が可変的で柔軟性があるという魅力がある。例えば「なべなべそこぬけ」は2人組でやると速いが、大人数で手を繋いで遊んだ時は、速度がかなり遅くなる（他者の動きの状況をその場で見て調整するためである）。さらに「わらべうた」は、総じて子どもの地声に近い音域であること、最高音と最低音の幅が狭いこと、音の種類が少ないことから、歌いやすい構造となっていることが多い。歌いながら「拍」に合わせた動き（手合わせ、手拍子、お手玉、ジャンプ、足踏みなど）を行うことで子どもが「拍」への意識を高め、歌を何度も聴き、声を合わせて歌う中で、音の高低を習得し「旋律」への意識を高めていくようにしたい。また、日本の伝統的な音階や日本語のイントネーションやリズムに沿った節回しで構成される「わらべうた」に数多く触れることで、その言葉や歌の美しさにも気付けるきっかけとなる授業になれば幸いである。

本題材では、数ある遊び歌の中でも、「ひらいたひらいた」、「とんぼとんぼ」、「十五夜さんのもちつき」を主に扱う。遊びながら歌ったり自然に体を動かしたりする活動を通して、子どもは曲想と旋律や拍、歌詞との関わりについて気付くだろう。「ひらいたひらいた」と「とんぼとんぼ」は主に「旋律」と歌詞への気付きを、「十五夜さんのもちつき」は「拍」と歌詞への気付きを促す教材として設定する。

ひらいた ひらいた

ひ ら い た ひ ら い た なんのはなが ひ ら い た れんげのはなが ひ ら い た ひ ら い た と

8 お も っ た ら い つ の ま に か つ - - ぼ ん だ

「ひらいたひらいた」を、便宜的に前半部分Aと後半部分Bに分けて考えてみる。

1番の歌詞でいうと、前半Aには「ひらいた」という歌詞が3回もあり、それが2・4・6小節目には「ラーラソミ」という同じ音形として出てくる。

7小節目からの後半Bは8分音符のリズムに切り替わり、「ひらいたとおもったら」の旋律は特に高低の幅が小さい。9小節目の「いつのまにか」は日本語のイントネーションと同じく「ま」にアクセントがきており、この曲全体の最高音である「レ」が歌われる。また、最後の「つぼんだ」では、今まで1つの小節の中で「ひらいた」と歌っていたところを、3つの小節にまたがってゆったりと花の様子を歌うように旋律の様子が変化する。

そのためこの曲は、花の様子が変わることを、歌詞だけでなく、旋律の変化からも表現しているといえる。例えば子どもは、前半Aを歌詞や旋律に合わせた動きを考えながら歌い、旋律のくり返しや高低を意識していく。また歌詞や旋律の特徴から、後半Bの「ひらいたとおもったら」の部分では花の様子が変わる前のいわゆる「ため」の状態を、「いつのまにか」では大きく変化する花の様子を、存分に味わって歌うことができるだろう。

とんぼ とんぼ

とん ぼ とん ぼ このゆびとまれ とん ぼ とん ぼ めをまわせ ま わ せ ま わ せ め を ま わ せ

8 とん ぼ とん ぼ このゆびとまれ とん ぼ とん ぼ めをまわせ ま わ せ ま わ せ め を ま わ せ

「とんぼとんぼ」も、同じく前半Aと後半Bに分けて考えてみる。

前半Aでは、①「とんぼとんぼ」の8分音符で音の高低も少なくゆったり歌う部分と、②「このゆびとまれ」や「めをまわせ」と16分音符で音程の幅も大きく細かなリズムで歌う部分が、1小節ごとに交互に出てくる。そのため子どもは、①1・3小節目でとんぼに呼びかける歌い方と、②2・4小節目

でとんぼに指示を出したりお願いしたりする歌い方を工夫していくことも考えられる。

また後半Bは、前半Aよりもゆったりとした少々ダイナミックな旋律に変化する。そのため子どもは、後半Bを大きな動作を取り入れ、のびのびとした歌い方をしてくださるとう考えられる。このように、旋律と歌詞の特徴から、感じたイメージをそれぞれ思い思いに表現してくれることを期待する。

十五夜さんのもちつき

じゅうごやさんのもちつきは トーン トーン トッ テッ タ トーン トーン トッ テッ タ

7 トッ テッ トッ テッ トッ テッ タ おっ こねた おっ こねた おっ こね おっ こね おっ こねた

13 トッ ツイタ トッ ツイタ トッ ツイ トッ ツイ タ シャーン シャーン シャン シャン シャン

19 シャーン シャーン シャン シャン シャン トッ テッ トッ テッ トッ テッ タ

「十五夜さんのもちつき」は、歌詞がもちつきの工程を表しており「トーン（＝つく音）」「トッテッタ（＝こね手が手を入れる音）」「おっこねた（＝もちをこねる意）」「トッツイタ（＝もちを返す意）」「シャーン（＝もちを取ったりちぎったりする音）」と、もちを完成させるまでを歌っている（それぞれの言葉の意味には諸説あり）。また、旋律が日本語の歌詞のイントネーションにも合っているため子どもにとって歌いやすく、動きを想像しやすい曲である。

また、曲全体を通して常に1拍目と3拍目に音がある。そのため例えば二人一組でつき手とこね手に分かれ、つき手が1・3拍目で常に一定の手拍子を打ってもちをつくまねをし、こね手は2・4拍目に歌詞（音）があるタイミングでつき手の手拍子の間に手を差し込み、もちをこねたり返したりするような遊びが行える。各フレーズの終わりに4分休符が入り、歌や言葉のまとまりを感じ取りやすい。曲を便宜的に6パートに分けてみると、B・C・Dパートは①「トーン トーン トッ テッ タ」と2回歌い、その後②「トッテトッテトッテッタ」と言葉を詰めて1回歌うという構成になっているため、子どもにとっ

ても①から②と段階を踏んで無理なく細かいリズムに慣れることができ、旋律の変化のタイミングもつかみやすいだろう。

このようにもちつきの動きを想像しながら歌うことを通して、一定の動作による拍の感覚を強めていくことができる考える。

本題材の実践により、子どもが遊んで動いて歌うことで「旋律」や「拍」への意識を高め、自然な発声や互いの歌声を聴いて声を合わせて歌う技能を身に付けていくことを期待する。

4. 本単元に願う『その子らしく学ぶ』

昨年度までに、音楽科部では「音や音楽に出合った時に、これまでの経験や感性などの『その子らしさ』が影響したそれぞれの思いをもった子どもには、学び進める原動力が生じ、自分と音や音楽とを結びつけながら進んでいく。その中で生まれた、自分の目指す表現に向かって何度も試行錯誤をしていく。そして、新たな発想を得たり自分の表現を見つめ直したりして目指す表現を更新する」姿が、音楽科における『その子らしく学ぶ』姿であると定義づけている。

第①時、本題材は「みんなは、あそびうた研究所の研究員です」という設定と「研究の成果として遊び歌を誰かに教えよ」という指令で始まる。子どもは「研究なんてワクワクする」「人に教えるには、色々な遊び歌を知っていないといけないな」という思いをもつ。そこで第①時から第②時にかけて、遊び歌を多様な人数の形態、多様な動きをして遊びながらたくさんの遊び方を知っていく。この時、担任だけでなく、本校職員、子どもの家族、附属幼稚園の教諭等からも協力を仰ぎ、それぞれの知っている遊び歌をたくさん教えてもらい、色々と試しながら遊んでみる。遊ぶ中で、子どもが手や足の動かし方や様々な動きのパターン、友達と協働する気持ちよさ等を味わい、「旋律」や「拍」の感覚につながる規則性を学んでいけるとよい。

第③時の「ひらいたひらいた」の学習では、まず曲を聴いた後、教師が「どのように動いたらいいかな」と投げかける。まずはそれぞれ感じるままに動いて歌ってみる時間をたっぷりとる。ある子は「ひらいた」で大きく開く花の様子を表現するかもしれない。またある子は「ひらいたとおもったら」で急に動きを止めているかもしれない。1年生の子どもは感じ取ったことや理由を言語化しきれない子いると考えられるため、そのような子どもが無意識に表現したことを、教師から「どうして開くような動きをしてみたの」「どうしてゆっくり動いてみたの」と問いかけてみる。『ひらいた』だから、大きく手を広げたらいいんじゃないかと思ったんだね』『ひらいたとおもったら』で、花の様子が変わる準備をしている雰囲気を感じ取ったんだね」などと、歌詞や旋律の変化を感じ取っている子どもの行動を観察して教師が丁寧に価値付けることで、子どもの無意識下にある音楽に対する思いを意識化させたい。

第④時の「とんぼとんぼ」の学習では、「ひらいたひらいた」の学習で得た「動き」のヒントをもとに、「どのように遊べそうかな」と問うことで、旋律や歌詞に一層意識を向けさせたい。おそらく子どもは、特に後半Bのゆったりとした旋律と「めをまわせ」の歌詞から、回ったり何かを回したりする動きを考えるだろう。この曲では「遊べそうかな」と問うことで、動きだけでなく「遊び方」も考え、1人や複数人で楽しめるような自由な発想をもって遊びを開発し、よりわらべうたを身近に感じながら歌えるようにしていきたい。

第⑤時の「十五夜さんのもちつき」の学習でも、「とんぼとんぼ」と同じく「どのように遊べそうかな」と教師から問いかける。子どもは「ひらいたひらいた」と「とんぼとんぼ」の学習で得た「旋律や歌詞と動きとのつながり」の感覚をヒントに、更にこの曲の特徴である「拍」の感覚も意識した歌い方をしていこう。ある子は「おもちをつく動きをやってみよう」と歌詞をもとに拍に合わせた動きを試しながら歌うかもしれない。またある子は「2人組で、おもちをつく役とこねる役に分かれてやってみよう」と人数の形態の工夫を行いながら歌うことで、一定の「拍」があるという曲の特徴に気付くかもしれない。またある子は「1回目と2回目(①)はゆっくりだけど、3回目(②)は忙しいから、切り替わるタイミングをちゃんと覚えたいな」と、旋律のくり返しに着目して歌うかもしれない。このように歌に向き合い、遊び方を試行錯誤しながら歌う経験を通して、子どもの友達の歌声を聴いて声を合わせ

て歌う力や、旋律や拍への意識や音楽に対する思いが高まっていくことを期待する。

また本題材の終了後、子どもが遊び歌を教えたい相手に教える活動を「生活科」との合科として位置付けて設定する。子どもの「遊び歌を教えたい思い」を大切にしながら、「どうして」「だれに」「いつ」「何の遊び歌を」「どのような遊び方で」「どのような方法で教えるか」など、教える目的とそれに合うやり方を話し合っていく。「まだ遊び歌を知らないだろうから、幼稚園の子たちに教えたい」と言う子もいれば「前はお母さんやお父さんに教わったから、今度は逆に教えてあげたい」という子もいるだろう。もしも、それで例えば附属幼稚園の子と交流した時に、園児がアレンジして1年生が想像もできなかった歌い方や動き方をしていたり、1年生が知らなかった遊び歌を逆に園児から教わったりして新たな発想や刺激をもらうような経験も面白い。

子どもが本題材で得た「遊び歌」を中心とした音楽経験を活かし、学校の授業の時間だけでなく日常生活でも「遊び歌」で遊んだり友達と歌い合ったりするなど、自ら音楽に関わり親しむ心の涵養につながることを願い、本題材を実践していく。

5. 題材構想（全5時間扱い／本時は第⑤時）

＜教師の投げかけ＞

子どもの表れ

最終時における子どもの表れ

○教師の働きかけ

① ＜ 色々なあそびうたを研究しよう ＞

【拍】

- (1人) いちじく、いちにい、ひとりきた、ちゃちゃつぽ
- (2人) おてらのおしょうさんが、おちゃらか、なべなべそこぬけ
- (4人) おせんべやけたかな、ずいずいずっころばし、

【旋律】

- (4人) かごめかごめ
- (全員) あぶくたった、はないちもんめ
- ・1人でやる遊び歌は、手拍子とかお手玉とか手遊びができる
- ・2人や4人でやる遊びは、友達とできるから楽しい
- ・みんなと気持ちを合わせて仲良く歌うことが大事だな

○研究所の研究員という設定で、曲の分析への意欲を引き出す。

○題材全体の見通しをもつために、「研究員への指令：遊び歌を教えよ」を出す。

○本題材で重点としている「拍」「旋律」が意識できるように、遊び歌を取り入れる。

② ＜ 教えてもらったあそびうたを研究しよう ＞

- ・附属幼稚園の先生は、こんな遊び歌を知っているんだな
- ・おばあちゃんから、こんな遊び歌も教えてもらったよ。一緒にやってみよう
- ・みんなと声を揃えて歌って動くのって楽しいな

○友達と協働する楽しさを味わうために、2人組、4人組、全員でもできる遊びを取り入れる。

○附属幼稚園の教諭と連携を取り、事前に知っている遊び歌を調査しておく。

③ ＜ 「ひらいたひらいた」を研究しよう ＞

- ・れんげの歌だ。きれいだな。歌いながら、動きを思いついたよ
- ＜ どのように動いたらいいかな ＞

○事前に、お家の人が知っている遊び歌を調査する宿題を出す。

- ・1人ずつ「ひらいた」で手の花を開く。「つぼんだ」で手の花を閉じる。歌詞が「ひらいた」「つぼんだ」だから。歌に合わせてゆっくり開いたり閉じたりするといい
- ・「ひらいた」の時に笑顔で明るく歌って、「つぼんだ」で悲しそうな顔で静かに歌う。ひらいたら気持ちも明るくなるけど、つぼんだときはがっかりした気持ちになるから

○国語科「つぼみ」の学習と関連付けられるよう、写真を用意し開花の様子を想像したりや花の感じを言葉で表したりする時間を設ける。

- ・ 4人で輪になって「ひらいた」で体を反る。「つぼんだ」で真ん中に集まってしゃがむ。体を大きく使って、みんなで協力して表した方が、みんなで遊べていいから
- ・ 4人で輪になって、「ひらいた」では元気よく回って、「つぼんだ」ではさみしそうに歩く。花がひらいたら嬉しいけど、つぼんだ時にはちょっと悲しいから。曲も悲しくなっているから

④ < 「とんぼとんぼ」を研究しよう >

- ・ とんぼの歌だ。こんな風に動いたら楽しそうだよ

< どのように遊べそうかな >

- ・ 1人で、1本指をくるくる回す
- ・ 1人で、両手を広げてくるくる回る
- ・ 4人で1人が1本指を出して、それを3人がつかんで、はなれないようにぐるぐる回る
- ・ お手玉を4人で回して、最後に一人だけ当たりにしたら面白そう

⑤ (本時) < 「十五夜さんのもちつき」を研究しよう >

- ・ おもちつきの歌だ。ペタペタついている感じがするね

< どのように遊べそうかな >

- ・ おもちをつく動きをやってみたい
- ・ 2人組で、おもちをつく役とこねる役に分かれてやってみたい
- ・ 1回目と2回目(①)はゆっくりだけど、3回目(②)は忙しいから、タイミングをちゃんと覚えたいな

- ・ 旋律や拍に合わせてみんなで動くときと歌声が揃って楽しかった
- ・ 旋律や拍に合わせて歌い方を考えられた。友達との交流で、色々な遊び方があるのを知って面白かった
- ・ たくさんの「遊び歌」を知って、歌ったり動いたりできて、楽しかった。幼稚園の子やお家の人にも遊び歌を教えてあげたいな。これから、他の曲でも歌を聴いたら思わず踊りたくなるよ

○常に「旋律」と「歌詞」に意識が向くよう、問い返したりよい動き方をしている子を取り上げて共有したりする。

○常に「旋律」と「歌詞」に意識が向くよう、問い返したりよい動き方をしている子を取り上げて共有したりする。

○「まーわせ」でなぜ動きを変えたか問い返し、旋律の変化に気付かせたい。

○常に「拍」と「歌詞」に意識が向くよう、問い返したりよい動き方をしている子を取り上げて共有したりする。

○子どもの「遊び歌を誰かに教えたい」という意欲を尊重し、本題材後に生活科と音楽科の合科の「指令：遊び歌を教えよ」の単元に入っていく。